

55. トロトラスト肝臓沈着の 経時的变化

小林孝俊

(京都府立医科大学・放射線医学)

トロトラストが生物学的に種々の障害をおこすことは実験的にも、また臨床的にも、早くから認められていたが、過去10〜20年前の注射によっておこされた障害が、しばしば臨床報告されるにいたった。

したがってわれわれは、トロトラストの肝臓沈着によって起こされる変化を、動物実験によって追求した。

実験には生後3カ月の家兎を用い、トロトラストを体重1kgあたり2ccの割合で、耳静脈より3日間にわたり分割注射した。

第3回目の注射終了後、家兎のレントゲン撮影をおこない、確実に肝臓に沈着したことをたしかめて飼育をつ

づけた。

オートラジオグラフィには、サクラフィルムを用い、ストリップング法によって行ない、露出時間は2〜4週間としたが、2週間で適当な露出時間と思われる。

現像定着の後、ヘマトキシリンギームザにて染色し、トロトラストの沈着部位を追求するとともに、その組織学的変化をしらべた結果、トロトラストは肝臓においては、クッパー氏星細胞に大多数がみられ、ときに肝細胞に沈着していることが認められた。

注射後24時間にて、すでにクッパー氏星細胞に著明に沈着しているのが、はっきりした組織学的変化はなかった。

注射後10カ月にいたると、クッパー氏星細胞の増加、肝細胞核の大小不同がみとめられ、明らかなトロトラストによる影響を示したが、繊維性変化などその他の変化は認められなかった。

IX. 脾 司 会 尾関己一郎教授 (久留大)

56. ^{131}I HSa による脾臓機能検査 (続) (手術または剖検により確認しえた症例)

片山健志, 齊藤 実

(熊本大学・放射線科)

手術または剖検により確認しえた各種疾患13例に RI-SA 用いた結果を報告する。

脾臓癌 4 例中の第 1 例は ^{131}I 血中濃度は著明に減少したが、放射線その他の治療により上昇をきたし、臨床症状の改善をみ、以後再び低下をきたし、臨床症状も悪化をきたした。第 2 例では当初は正常、開腹により脾頭部に限局せる癌を認め癒着のため手術不能で、当科に転科後再検するに著明に減少、第 3, 4 例では著明または明らかな減少をきたした。慢性脾臓炎の第 5 例では治療により上昇し、臨床症状も改善。胃癌および細網肉腫に脾浸潤を伴った第 6, 7 例では前者は明らかに、後者は著明に減少。胃癌 3 例ではいずれも各時間値とも特記すべき変化なく、後腹膜腫瘍 (ゼミノームの転移) の 2 例ではいずれも脾臓は正常であったが、 ^{131}I 血中濃度も異常なく、胆のう症の 1 例では 1 時間値の軽度減少がみられた。

アミラーゼ値については尿中では 16〜32 を正常値とすれば、第 1 回検査で異常とみなされるものは脾臓疾患 7

例中の 6 例、血清では 8〜16 を正常値とすれば、同じく 1 例で文献にもみられるとおりに、尿、血中のアミラーゼ値は必ずしも並行せず、またこれらは ^{131}I 血中濃度の程度とも平行を示さない。

上記の脾臓疾患例中には肝障害例が相当数に認められ ^{131}I 血中濃度は肝障害によっても減少をみる事がわかるが、第 1 例において頻回にわたる検査で肝障害が証明されているにもかかわらず ^{131}I 血中濃度は正常値への回復傾向がみられ、第 5 例においても肝機能障害と ^{131}I 血中濃度は平行的関係を示さない。このことは、 ^{131}I 血中濃度の変化に対して肝機能の影響も軽視できないが、脾機能の影響は重要な役割を演じていると解してよいことを示唆すると考えられる。

なお、脾臓疾患以外の 11 例 (非手術) では ^{131}I 血中濃度はほとんど異常なく、慢性脾臓炎の 2 例では低下した。

質問: 石川 誠 (東北大・山形内科)

脾臓例で ^{131}I -triolein 試験も行なって、比較されたものがあるか? 脾臓でも化学的蛋白バランス法では、脂肪の消化吸收障害があるにもかかわらず必ずしも異常が認められないような印象をうけているので。

答弁: 片山健志 (熊本大学・放射線科)

一応、実験中であるが、いまだ都合によりまとめてい